第9回みんゆう新聞感想文コンクール作品紹介

中学生の部　優秀賞

「孤独の在り方」

信陵中2年　小賀坂（こがさか）　百合（ゆり）さん

孤独とは何か。私はこの投稿を読んでそれを一番最初に考えた。孤独と聞くとこの投稿の著者が述べているように、あまり良いイメージを持たないかもしれない。しかし一人でいることは別に悪いことではないと思う。私もどちらかというと一人が好きだし、ゆっくり静かな場所で考え事をするのは良い時間だと思う。しかし、投稿にあるように孤独にならないため、SNSでつながりをとろうとする人が増えている。私は、これを読んだ時、とても不思議に思った。なぜなら、インターネットのつながりが多いからといってそれは果たして孤独ではないというのだろうかと疑問が生じたからである。ネット上にいくらたくさん友達がいても、現実に友達がいないなら、その人は実感がないだけで実際は孤独なのではないかと思う。人とのつながりをとるなら、自分から話しかけて現実の友達をつくる方が価値があると私は信じている。

さらに、なぜ孤独になりたくないと思っている人が多いのかも疑問に思った。テレビやニュースを見ていてもみんながまわりに溶け込んで一人になったり目立ったりしないようにして生きている人が多い気がする。多くの人が思っているように孤独は怖いことだろうか。投稿の中で、孤独は「色々な考えを掘って深めていく時間」とあった。私も、その通りだと思う。孤独でなければできないこともたくさんある。そして、孤独はまわりから、解放されている時間でもあると思う。何を考えていても、どんな感情になっていても、それを気にしたり、とがめたりする人はいない。

そして、いつもまわりに人がいる環境があたりまえになってしまうと、投稿のとおり、自己が形成されず、自分を失ってしまうと思う。自分で自分に質問したり、自分はどんな人かを孤独な環境でじっくり考えるなら、本当の自分を見いだせると思う。それから、孤独の時間があるからこそ、孤独ではない時間を楽しみ、まわりとうまくやっていくことができるのだと思う。

私は、学生などの若い人が特に、孤独の時間が少ないと感じている。学校でも家でも誰かがいることが多いからである。それでも、たとえ短い時間でも孤独の時間は、決してなくしてはいけないものだと思う。一人で何かをすることや、一人で何かを真剣に考えることは何にでも必要な力だと思う。

私は、一人だと何もできない人でも、一人でないと力を発揮できない人でもなく、一人でもみんなとでも協力しながら自分らしくいられる人になりたい。孤独を大切にして、人とのつながりを持てるなら、なりたい自分になれる日はそう遠くないはずである。

「認知症サポーター」

郡山五中3年　桜井（さくらい）　喬仁（たかと）さん

認知症サポーター。初めて聞いた言葉だ。

認知症は、脳の神経細胞が死ぬことによって発症し、家族の名前すら忘れる、目を離した時に徘徊してしまう、突然怒り出すなど様々な症状が出る。家族での介護は想像以上に大変で、長い介護生活は本人は勿論、家族も病との闘いだ。次第に心に余裕が無くなり、憎しみさえ沸いてきてしまうという。誰にも相談できず悩みを抱えている人もいる。結果、介護疲れから殺人を犯すという痛ましい事件も起きている。それが介護の現状なのだ。

その状況を少しでも改善できればと誕生したのが認知症サポーターだ。認知症といえば「徘徊や暴力で周囲を困らせる存在」という先入観を払拭し、患者とその家族が住みやすい街を作っていこうと活動している。サポーターを増やすために講座も開いている。短時間の講座を受ければ、サポーターの一員だ。養成活動は全国で行われ、順調に増えている。地域によっては小中学校でも講座を行っているそうだ。サポーターになったら、困っていそうな患者を見かけた時、優しく声をかけてあげたり、介護者の話を聞いたりすること、また、認知症患者をより理解し、それを家族や周囲の人達に話すことだけでも立派な活動なのだそうだ。しかし、活動には課題もあると思う。それは、地域によって養成度に差があるということだ。本県は他県に比べサポーターが少ないと感じる。なんとかできないのだろうか。例えば、県から市町村、そして、町内会、小中学校へと広げる。学校では、道徳の授業に取り入れるなど何か方法があると思う。

僕の祖母は認知症だ。少しの物忘れから始まり、段々身の回りのことができなくなってしまった。症状が進み家族での介護が難しくなり、今は施設に入っている。会いに行った時、本当はたくさん話したいのだが、僕の名前を忘れてしまっている祖母にどのように接して良いか悩んでしまう。目の前にいる人が誰だかわからない、自分の体が思い通りにならない、祖母はどのような気持ちなのだろうか。祖母が以前の姿からかけ離れていってしまうのを見ていると、とても寂しい気持ちになる。

認知症が増加する今、苦しんでいる人達はたくさんいると思う。だが、認知症を何となくしか知らない人達が多いのも事実だ。患者や家族しか知らない苦しみ。身近にいる人が話を聞いてあげるだけでも支えになるのではないだろうか。当事者と同じ気持ちになることは難しい。でも、誰かが寄り添ってあげれば、少しでも助けることができると思う。サポーターが活動していることは、一人の患者、一つの家族を救う素晴らしいことだと思う。認知症は人事ではない。僕もサポーターになって少しでも何か力になれればと思う。

「不登校について考える」

中央台南中1年　鈴木（すずき）　ゆわさん

「学校に行くのがつらい時は」とその関連記事「私の体験」を読んだ後、私はこの暑さを忘れるような寒々とした気持ちになった。不登校という文字を何度も見た時、「なに、これ？」と思うと同時に、小学校時代に同級生が突然学校に来なくなったことを思い出した。あの時、同級生はどんな気持ちだったのだろう。私は他人事のように「どうして？」と感じただけで救ってあげようなどとは考えなかった。そして、不登校が誰にでも起こりうる問題などと考えたこともなかった。

私はこの記事を読んでお世話になっている近所の元校長先生に話した。先生はこの問題にたずさわった経験があり教えてくれた。「実はね、記事にもあるように夏休み明けに不登校が増えるんだ。その子が一学期中に心に悩みを抱き始め、もう少し頑張ると夏休みだからと我慢しているんだよ。休みに入ると安心するけれど二学期が近づくとつらくなって学校に行けなくなるんだ。」と話してくれた。学校に行くことが出来なくなった友人の気持ちが少し分かってきた気がした。

「私の体験」には、不登校になった理由が書かれていた。障害を持っているために周囲と溶け込むことができない。学習面でつまずいたり、家庭での期待が強かったりと様々だ。でも紙面で公表した全員がその後は普通に生活している。みんなそうなんだろうか。そうでない人も多くいるのではないかと思った。そんな時、どうすればいいのか。気をつけることはあるのか。思いは現実の問題になっていった。相談した元校長先生に尋ねてみた。先生は微笑みながら答えた。「不登校は心の糸がからみ合った状態。無理にほどいてはいけない。だから、『頑張れ』は禁句だよ。温かく時間を気にせず心の糸がほどけるように見守ってあげるのがいい。」

私は記事を読んで話を伺って自分としてどう行動すればいいのか考えてみた。まず、不登校に至った人は何も悪いことをしたわけではない。学校は行かなければならない場所ではなく、行けば楽しいところだ。勉強や部活に専念でき、出来ることが増える。何よりも友だちとのふれあいが楽しい。悩みを打ち明けられる親友を作るようにしたい。悩みを抱く友だちの立場になって親身に話を聞けるようにしたい。みんながそう思って行動すれば、人の嫌がることを平気で言うことやいじめなどなくなっていくのではないだろうか。学校に行けなくなった人には学校の楽しさを伝えよう。あせらず、ゆっくりと。学校での出来事を家で話すことも大切だ。もしかして自分の悩みのシグナルが出るかもしれない。救ってくれる人は身近にたくさんいると私は思う。私も救える人になりたい。皆が、楽しく過ごすことの出来る学校になるように努めたい。

高校生の部　優秀賞

「子ども食堂について」

学法石川高2年　金沢（かなざわ）　瑛歩（あきほ）さん

近年、子供の孤食による偏食や栄養不足が増えている。そして孤食により孤独感を感じる子供も増えている。そのような問題を解決するため、全国的に子ども食堂が増えている。バランスのとれた健康的な食事を近所の子供たちと囲むことができる。地域によっては、食事だけでなく勉強したり、遊んだりといった、コミュニケーションを取り子供の居場所を確保する場としての役割も担っている。

私は子ども食堂に関する記事を今までもたくさん見てきたが、子ども食堂は子供に対してだけでなく、地域社会にも大きなメリットをもたらしている。たとえば、地域とのかかわりが希薄だった人が、自宅を子ども食堂として提供したところ近所の子供やその両親などとあいさつや会話を交わすようになり、コミュニケーションを取ったことで孤独感を感じずに過ごせるようになったり、若い人が離れがちだったお寺を子ども食堂として提供したところ、子供やその親で賑わい人が集まるようになるなど、地域の絆が深まるというメリットがある。

しかし課題も多く残っている。資金や人手不足、人々に子ども食堂の存在の認知がされていないことだ。子ども食堂を運営するにあたり、調理をするスタッフが必要になる。スタッフはボランティアが望ましいが、現実では給料を支払い専用のスタッフとして働いてもらうため人件費がかかる。そして食材を調達するのにもお金が必要になる。そのためこのように企業や団体からの寄付金や助成金があることで、子ども食堂の運営がしやすくなると思う。そして子ども食堂の存在を人々に認知してもらうための広告も大切になる。子ども食堂の存在は知っていても、どこにあるのか、いつやっているのかなどの詳細を知らない人が多くいると思う。だからこそホームページをつくったり新聞社が広告を載せたり、実際の活動状況や実績を伝えていくべきだと思う。今後の課題や目標を伝えていけば、少しずつではあっても、これからの未来を担う子供たちの助けになりたいと思う参加者が増えたり、地域の協力を得られるようになると思う。

このプロジェクトでは、子供に対してだけでなく地域社会に対しても多くのメリットをもたらしてくれる。たくさんの人々で協力して参加すれば、地域の活性化を進められる。その広告を新聞社で担い、資金調達に関して企業や団体で担うことで、このプロジェクトを成功させることができると思う。子供や地域に対してメリットがたくさんあるこのプロジェクトを多くの人の協力で成功させてほしいと思う。

「観光路線の利用を考える」

福島西高3年　佐藤（さとう）　令（りょう）さん

「JR只見線の復旧工事開始、観光路線に軸移す」という見出しが私の興味を強く惹きつけた。

二〇一一年七月の新潟・福島豪雨で被災し、不通となっていたJR只見線会津川口―只見間の復旧工事が始まった。県は、三年後をめどに再開通を見据えて住民や観光、教育分野での利用を増やすための具体策を盛り込んだ利活用計画をまとめた。しかし、沿線の奥会津では人口減少、高齢化が進み、被災前の一日当たりの利用者数は四十九人、被災後の代行バスに移行された後は同じく三十七人と減少した。再開通後に地元住民の利用が急増することは考えにくいことから、沿線の長谷川盛雄金山町長は「単に生活路線ではなく観光路線にしていく必要がある」と指摘している。

私は将来、鉄道業界に携わる仕事を目指しているため、この記事を読んで現在の鉄道業界が抱える問題として考えていかなければならないと感じた。現在、都市部の路線では混雑が問題視されているのに対し、地方路線では利用者が少なく、只見線は「赤字路線」としての厳しい現状がある。こういった問題の根本にあるのは少子高齢化や若者の都市部への移住であると考える。通勤や通学で生活路線として利用する人が少なければ、赤字路線として廃線に追い込まれてしまうことも考えられる。中には、車を持たない人や足の悪いお年寄りの方が買い物や病院へ行くための交通の便として利用する場合もあるだろう。そのような方々のために、只見線で電車を走り続けさせるには観光路線を軸に移すことは最善の方法なのではないか。

只見線の走る会津地方は、自然が豊かで魅力がたくさんある。沿線には絶景スポットと呼ばれる田園風景、雪化粧をした山々など見る人を魅了させる風景があり、鉄道ファンには有名である。また、沿線に温泉が多く、旅の疲れをリフレッシュさせてくれるのも旅の醍醐味のひとつだ。私はまだ只見線に乗車したことがないので再開通したら只見線とその沿線を存分に味わいたい。このように只見線には観光に最適な場所が多くあり、観光として利用することを推進していけば乗客の増加に繋げることができるのではないかと考える。また、各学校の教育的利用にも使われているということで、今後の只見線の発展から目を離すことはできない。

各地で利用者の減少で赤字になっている路線もあり、自分にできることはどのようなことで、将来鉄道業界に入り貢献していくためには何が必要なのかこの夏休みを利用して考えていきたい。鉄道は単なる交通の便だけでなく、人と人とを繋ぎ、旅をする時の足となる欠かせないものなので鉄道利用の無限の可能性を深く追究していきたい。

「女性の夢が叶う社会へ」

安積高2年　鈴木（すずき）　麻由（まゆ）さん

私は今年、高校二年生になった。テストの数や進路に関する話題も、昨年より数段多くなった。つまり、嫌でも受験を意識する時期にきているということだ。今まで以上に将来について考え、自分のめざす目標達成のために努力している毎日である。

そんな私の目に「女子を一律減点」という見出しが飛び込んだ。不正入試問題でも話題となった東京医科大学で、今度は一般入試の女子受験者の得点を一律減点していた疑惑が浮上したというのだ。女性は結婚や出産で職場を離れるケースが多いため、女子合格者を三割前後に抑え、系列病院などの医師不足を回避する目的があったらしい。しかも、この操作が行われていたことは、受験者には一切伝えられていなかった。あまりにも理不尽ではないか。明らかな女性への差別ではないか。こんなことが許されていいのか。やり場のない憤りを感じた。確かに、子どもを産むことができるのは、女性だけに与えられた特権である。しかし、それが理由でめざす道が狭められてしまうというのは、どうにも納得がいかない。まさに、能力より「使いやすさ」が重視された結果である。医学の道を志す若者たちを、あたかも病院経営のための道具と考えているように思えてならない。医者になるという目標に向かって必死に受験勉強をしたのは、男子受験生も女子受験生も全く同じである。もしかしたら、合格した男子受験生よりも努力をし、能力のあった女子受験生がいたかもしれない。そう考えると、一点の重みと向き合いながら受験に向かう者として、さらには同じ女子として、いたたまれない気持ちでいっぱいになる。

医療現場は未だに男性社会だ。長時間の残業や時間に不規則な救急への対応など、過酷な労働環境が大きな要因だ。出産や子育て中の女性にとって厳しいのは無理もない。だから医療現場では、男性医師が求められる。働き方改革が叫ばれている昨今、医療現場でも女性医師が仕事を続けていきやすいような柔軟な働き方の導入が必要不可欠なのではないだろうか。さらには、男性が育児休暇を取りづらかったり、最近話題のマタニティーハラスメントとやらで、せっかくの女性のための制度を利用しづらかったり…。こんな現状もあるようだ。医療現場だけに限らず、世の中にはまだまだ男女格差の課題が山積しているようにも思える。まずは、意識改革を含めた働き方改革を検討していく必要があるのではないだろうか。

将来、私も社会に貢献できる職業に就きたい。そして、働きながら結婚も出産も子育てもしていきたい。そんな女性の夢が叶う社会であってほしいと強く願いながら、今日も目標に向かって勉強に励む私である。